

東シナ海開戦7

水機団

大石英司

Eiji Oishi

立ち読み専用

立ち読み版は製品版の1～25頁までを収録したものです。

ページ操作について

- 頁をめくるには、画面上の▶(次ページ)をクリックするか、キーボード上の▶キーを押して下さい。
- もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。
- 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。
- 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

口絵・挿画 安田忠幸

目次

プロローグ	13
第一章 抗体	22
第二章 尋問	40
第三章 飯倉公館	65
第四章 タートル	94
第五章 帰還	119
第六章 水陸機動団	146
第七章 凱旋	173
第八章 総辞職	194
エピローグ	205

登場人物紹介

日本

〈特殊部隊サイレント・コア〉

どもんこうへい
土門康平 陸将補。水陸機動団長。出世したが、元上司と同僚の行動に振り回されている。

〔原田小隊〕

はら たくみ
原田拓海 一尉。陸海空三部隊を渡り歩き、土門に一本釣りされ入隊した。今回、記憶が無いまま結婚していた。

はたけともゆき
畑友之 曹長。分隊長。冬戦教からの復帰組。コードネーム：ファーム。

たかやまけん
高山健 一曹。分隊長。西方普連からの復帰組。コードネーム：ヘルスケア。

おおしろまさひこ
大城雅彦 一曹。土門の片腕として活躍。コードネーム：キャッスル。

まちだ はるお
待田晴郎 一曹。地図読みのプロ。コードネーム：ガル。

たぐちしんた
田口芯太 二曹。部隊随一の狙撃手。コードネーム：リザード。

ひがひろみ
比嘉博実 三曹。ドンパチ好きのオキナワン。田口の「相方」を自称。コードネーム：ヤンバル。

あづまだい き
吾妻大樹 三曹。山登りが人生だという。コードネーム：アイガー。

〔姜小隊〕

かんあや か
姜彩夏 三佐。元は韓国陸軍参謀本部作戦二課に所属。司馬に目をかけられ、日本人と結婚したことで部隊にひっぱられた。

うるしげらたけとみ
漆原武富 曹長。司馬小隊ナンバー2。コードネーム：バレル。

ふくとめだん
福留弾 一曹。分隊長。鹿児島県出身で、部隊のまとめ役。コードネーム：チェスト。

い い かける
井伊翔 一曹。高専出身で部隊のシステム屋。コードネーム：リベット。

みずの とま お
水野智雄 一曹。元体育学校出身のオリンピック強化選手。コードネーム：フィッシュ。

にしかわしんすけ
西川新介 二曹。種子島出身で、もとは西方普連所属。コードネーム：トッピー。

み どうそう ま
御堂走馬 二曹。元マラソン・ランナー。コードネーム：シューズ。

あねこうじ さねあつ
姉小路実篤 二曹。父親はロシア関係のビジネス界の大家。コードネーム：ボーンズ。

かわにし まさふみ
川西雅文 三曹。元Jリーガー。コードネーム：キック。

ゆらしんじ
由良慎司 三曹。西部普連から引き抜かれた狙撃兵。コードネーム：ニードル。

おだぎりしょう
小田桐将 三曹。タガログ語を話せる。コードネーム：ベビーフェイス。

あびる あきら
阿比留憲 三曹。対馬出身。西方普連から修業にきた。コードネーム：ダック。

あかばねたくま
赤羽拓真 三曹。フィールドでのゲテモノ食いに長ける。コードネーム：シェフ。

〔訓練小隊〕

あまひひろし
甘利宏 一曹。元は海自のメディック。生徒隊時代の原田の同期。訓練小隊を率いる。コードネーム：フアラライ。

〔民間軍事会社〕

おとなしせいじ
音無誠次 土門の元上司。自衛隊退役者からなる民間軍事会社の顧問。`ヘブン・オン・アース、内に滞在していた。

にしな ゆきお
西銘悠紀夫 元二佐。`魚釣島警備計画甲2、の指揮をとる。台湾軍のパイロット救出作戦中に解放軍と交戦し、死亡。

あかいしとみひこ
赤石富彦 元三佐。

こぐれりゅうじ
木暮龍慈 元一曹。狙撃手。二〇年前に引退し、北海道でマタギとして暮らしていた。

〔水陸機動団〕

しほひかる
司馬光 一佐。水陸機動団教官。引き取って育てた娘に店をもたせるため、台湾にいたが……。

まつ おしょう
松尾捷 陸将補。団司令部の本部管理中隊と、第一陣の第一水陸機動連隊第二中隊を率いて魚釣島上陸作戦の指揮を執る。

はたけやまそういちろう
畠山惣一郎 一佐。松尾陸将補率いる部隊のナンバー3。

かんだちゅうじ
神田忠司 三佐。第一中隊長。空挺出身。

〈航空自衛隊〉

まるやまくみ
丸山琢己 空将。航空総隊司令官。

ながせ かつか
永瀬豊 二佐。原田が所沢の防衛医大付属病院で世話になった医師。

防衛医大卒で陸上自衛隊のレンジャー・バッジを持っている変
わり者。

みやけたかとし
三宅隆敏 三佐。予備自衛官。五藤彬の恩師。

(総隊司令部)

はぶみねみつ
羽布峯光 一佐。総隊司令部運用課別班班長。

きたがわ・さいこ
喜多川・キャサリン・瑛子 二佐。情報将校。横田出身で、父親はイ
ラクで戦死したアメリカの空軍将校。

いがらしひろし
五十嵐洋 二佐。陸上総隊運用部所属。ウイングマークの持ち主の
へり屋。

しんじょうあい
新庄藍 一尉。父親は防府の鬼教官だった。TACネーム：ウィッチ。

(警戒航空団)

とがわけいこ
戸河啓子 二佐。飛行警戒管制群副司令。ウイングマークをもつ。

(第六〇二飛行隊)

うちむらたじ
内村泰治 三佐。第六〇二飛行隊副隊長。イーグル・ドライバー上が
り。

〈海上自衛隊〉

きよまさあき
佐伯昌明 元海上幕僚長。太平洋相互協力信頼醸成措置会議の、日本
側代表団を率いていたが、バイオ・テロによる感染症で死亡。

かわはたゆたか
河畑由孝 海将補。第一航空群司令。

しもぞのしげき
下園茂喜 一佐。首席幕僚。

いせざきたもつ
伊勢崎将 一佐。第一航空隊司令。

(第一護衛隊群)

くにしましゆんじ
國島俊治 海将補。第一護衛隊群司令。

うめはらとくひろ
梅原徳宏 一佐。首席幕僚。

(航空集団)

ひのうきどう
樋上幸太 二佐。P-1 乗り。前職は鹿屋の第一航空隊幕僚。航空隊
総司令部のエイビス・ルームに参加。

〈外務省〉

かたくらさういちろう
片倉宗一郎 外務審議官。サイレント・コアの内部事情にも明るい。

くじょうひろし
九条寛 外務省・総合外交政策局・安全保障政策課係長。`ヘブン・
オン・アース、日本側の事務方トップ。

〈防衛省〉

〔陸幕防衛部〕

たけよし のり
竹義則 二佐。航空隊総司令部のエイビス・ルームに参加。

〔海幕防衛部〕

ふくはらくにひこ
福原邦彦 二佐。海幕防衛部装備体系課付き。前職は護衛艦の艦長。
航空隊総司令部のエイビス・ルームに参加。

〔豪華客船 “ヘブン・オン・アース、”〕

ガリーナ・カサロヴァ “ヘブン・オン・アース、”の船医。五ヶ国語を喋るブルガリア人女性。

ごとうあきら
五藤彬 “ヘブン・オン・アース、”の船医。感染症学が専門の研究者。

これむね ひゅうま
是枝飛雄馬 プロオケを目指していた青年。プロオケの先輩から誘われ、“ヘブン・オン・アース、”に乗り込んだ。

なみかわ まりこ
浪川恵美子 是枝が思いを寄せるピオラ奏者。音楽教師を三年で辞めて、奏者に復帰した。

ナジブ・ハリーフア ハリーフア&ハイガー・カンパニーのCEO。
豪華客船内のバイオ・テロの首謀者。ネイビ・シールズによる制圧作戦によって射殺された。

中国

(中南海)

パンホンター
潘宏大 中央弁公庁副主任。

(国内安全保衛局)

チンチウオファン
秦卓凡 二級警督(警部)。

スウユエ シュウエンロン
蘇躍 警視。許文龍が原因でウルムチ支局に左遷されたと思っていた。

(科学院武漢病毒研究所)

マリモン
馬麗夢 博士。主任研究員。

〈海軍〉

(総参謀部)

レン スユアン
任思遠 少将。人民解放軍総参謀部作戦部特殊作戦局局長兼特殊戦司令官。四一四突撃隊を立ち上げた。

ホアンドン
黄桐 大佐。局次長。

(`蛟竜突撃隊。)

シユイヌストン
徐孫童 中佐。`蛟竜突撃隊。を指揮する。

ソンチン
宋勤 中佐。元少佐の民間人で、北京大学日本研究センターの研究員だった。任思遠海軍少将に請われ復帰した。

(南海艦隊)

トンシヨウネン
東曉寧 海軍大将 (上将)。南海艦隊司令官。

ホワイチ
賀一智 海軍少将。艦隊参謀長

ワントン
万通 大佐。艦隊対潜参謀。

(東海艦隊)

タンドンミン
唐東明 大将 (上将)。東海艦隊司令官。

マチンリン
馬慶林 大佐。東海艦隊参謀。アメリカのマサチューセッツ工科大学でオペレーションズ・リサーチを研究し、博士号を取った。その後、海軍から佐官待遇でのオフアがあり、軍に入る。唐東明の秘蔵っ子。

(K J - 600 (空警 - 600))

ハオフェイ
浩菲 中佐。空警 - 600 のシステムを開発。電子工学の博士号を持つエンジニア。

イエファン
葉凡 少佐。空警 - 600 機長。搭乗員六人のうちの唯一の男性。

チンイー
秦怡 大尉。副操縦士。上海の名門工科大学、同済大学の浩菲の後輩。電子工学の修士号をもつ。

カオシュエビン
高学兵 中尉。機付き長。浩が関わるずっと前から機体開発に関わっていたベテランエンジニア。

(Y - 9 X 哨戒機)

チュンクイラン
鍾桂蘭 少佐。AESAレーダーの専門家で、哨戒機へのAESAレーダーの搭載を目指す女性。

(第 164 海軍陸戦兵旅団)

ヤオイエン
姚彦 少将。第 164 海軍陸戦兵旅団を率いる。

ワンヤントン
万仰東 大佐。旅団参謀長。

レイイエン
雷炎 大佐。旅団作戦参謀。中佐、兵站指揮官だったが、姚彦が大佐に任命して作戦参謀とした。兵士としては無能だが、作戦を立てさせると有能。

タイイーチ
戴一智 中佐。旅団情報参謀。情報担当士官だったが、上官が重体になり旅団情報参謀に任命された。

ファンガオユエン 張高遠 博士。人民解放軍の極秘研究機関 `S 機関、所属。`宅男、の風貌だが、数理データ・サイエンスの若き天才で、ある任務を命じられ寧波海軍飛行場に派遣された。

(台湾)

ライシハオチンオ ロンユン 頼筱喬 サクラ連隊を率いて戦死した頼龍雲陸軍中將の一人娘。台北で新規オープンした飲茶屋の店主。司馬光が `チャオ、と呼び、店の開店を支援している。

ワンチーハオ 王志豪 退役海軍中將。海兵隊の元司令官で、未だに強い影響力をもつ。王文雄の遠縁。

ワンウエンション 王文雄 司馬の知り合いで、司馬は `フミオ、と呼ぶ。京都大学法学部、大学院に進み、国民党の党職員になった。今は、台日親善協会の幹部候補生兼党の対外宣伝部長。

〈陸軍〉

(陸軍第 601 航空旅団)

フーシヤンジエン 傅祥任 少将。旅団長。

ファンチェンダマン 馮陳旦 中佐。作戦参謀。

(`龍城部隊。)

ピンロンイ 平龍義 少佐。第 1 中隊長。

ワンチーリン 藍志玲 大尉。女性のグラビア・アイドル。第 1 中隊ナンバー 3 の乗り手。コールサイン：マリリン。

ファンイーチェン ガ ナ 黄益全 少尉。藍志玲大尉の前席射撃手。既婚者のベテラン。

〈海軍〉

リーヂーチャン 李志強 大将。

ツァイズン 蔡尊 中佐。

(`海龍。)

イエンシエンハオ 顏昇豪 大佐。`海龍、艦長。

チュフイ 朱蕙 中佐。`海龍、副長。以前は司令部勤務で燻っていたが、切れ者の女性。

(台湾軍海兵隊)

〔第 99 旅団〕

チェンヂーウェイ
陳智偉 大佐。台湾軍海兵隊第 99 旅団の一個大隊を指揮する。

ホァンジュンナン
黃俊男 中佐。作戦参謀。大隊副隊長でもある。

ウージンフ
吳金福 少佐。情報参謀。

ヤンヂーミン
楊志明 二等兵。美大を休学して軍に入った。

〈空軍〉

リーイェン
李彦 少将。第 5 戦術戦闘航空団を指揮する。

リウジュンホン
劉建宏 中佐。第 17 飛行中隊を率いる。

/// シンガポール ///

〈インターポール・反テロ調整室〉

シユウエンロン
許文龍 警視正。R T C N 代表統括官。

メアリー・キスリング R T C N の次長。F B I から派遣された黒人女性。

しばたゆきお
柴田幸男 警視正。警察庁から派遣されている。

パクボムホ
朴机浩 警視。韓国警察から派遣されている。

/// イギリス ///

〈英国対外秘密情報部 (M I 6)〉

マリア・ジョンソン M I 6 極東統括官。大君主。オーバーロード

東シナ海開戦7

水機団

プロローグ

東シナ海の荒波に翻弄されるその大型ラフトは、詰め込めば、哨戒機のクルー全員が乗っても沈まない前提で開発された。Y・9X哨戒機には、そのラフトが三個装備されていた。今、洋上に浮かんでいるのはたったの一つで、しかも乗っているのは、二人だけだった。

日本の巡視船に助けられ、無事だった乗組員と再会の喜びに浸っていたまさにその瞬間、巡視船は海中からの魚雷攻撃を受けて撃沈した。そこでまた搭乗員はばらばらになった。

ただ、彼らにとつて幸運だったのは、その時、彼ら彼女らは、巡視船の飛行甲板にいたおかげで、

助かったということだった。巡視船は一瞬で沈み、船内にいたクルーのほとんどは助からなかった。

そして、恐らく他の搭乗員は、沈みゆく巡視船から浮上してきて自動的に展開した日本のラフトに乗り込めただけだった。

投げ出された衝撃で気を失ったY・9X哨戒機の開発責任者・鍾桂蘭^{チンクイラン}海軍少佐はそう考えていた。彼女は、ゲストとして哨戒機に乗り込んできたS機関の天才数学者、張高遠^{ツァンガウユン}博士に助けられたのだ。まだ童顔の青年で、しかも飛行機嫌いだった。二人で寝るには広すぎる空間だったが、海は時化^していた。救出される前からすでに吐いていたが、

今はもう胃液しか出てこない。喉が荒れて飴玉のひとつも欲しいところだ。

シーアンカーを打っているものの、ラフトは何度も転覆しそうになった。救出される前の闇夜の時化より酷かった。

鍾少佐は、脚を前方に投げ出し、両手で舷縁部分のハンドルを握って姿勢を保持していた。そうしないと、波に乗り上げる度に身体が投げ出されるのだ。だが、冷たい海水が容赦無く浸入し、深さ一〇センチほどまで溜まっている。構造上、フロート構造の舷縁部分まで目一杯水が来ても沈まないはずだが、恐らく低体温症で一晩と持たないだろう。

「ねえ、私たち、そろそろ大事な話をしなければならぬと思うの……」

少佐は、体力を振り絞って声を出した。もう丸半日こんな状態なのだ。どこかの遊園地で、止ま

ることの無いジェットコースターに縛り付けられているような状態だ。

「一応、気付いてはいますけどね。そこにあるはずの、救命キットが無くなっていることでしょうか？」

「ええ。オレンジ色の。あれは、ザック構造になっていて、背負えるのよ。どこかの海岸や無人島に漂着した後、それを担いで上陸できるように。ビスケット、浄水器に、発煙筒に、釣り道具も……」

「確か、投げ出されないように、紐で舷縁に止めてありましたよね？」

「紐じゃなくて、あれは、背負う時のシヨルダ一部分よ。たぶん、私が外したんです。でもどうして外したのか、その理由を思い出せない」

「回収されたラフトがデッキ上に載せられて、でも魚雷攻撃の衝撃で海に投げ出されたときに、そ

「これはたぶんラフトの外に飛び出たんですよ」

「でも幸い、バケツは紐で止めてあったわけね」

バケツと言ってもソフト・バケツだ。少し厚手のスーパールの袋の口に、輪っかが付いているような、ただのビニール製の袋に近い代物だったが、この巨大な洗濯機の中では、ないよりはましだ。

海上に投げ出されてから、すでに四時間が経過している。この時化がこの後どうなるのか全く予想できないのが辛かった。

仮に、日本側がまた救難ヘリを飛ばしてくれにしても、まずは巡視船の乗組員捜索が先だろう。中国政府に嚴重抗議し、安全を保障するという言質を取ってからでなければ、巡視船は再度この海域には現れない。

いずれにしても見通しは暗い。この四時間、飛行機のエンジン音は一切聞かなかった。敵味方含めて。

「先輩の警告を聞くべきだった……。私があそこで意地を張らずにさっさと後退を命じておけば、誰も死なずに済んだのよ」

「少佐、率直に言いますが、聞き飽きたし、量子力学や紐理論でも過去へのタイム・トラベルはできないことになっている。助かるまでその愚痴は封印してくれませんか？ なぜなら、僕はその……、じきに爆発して、怒鳴り声を上げそうな気がするのです。起こったことは、全くその通りで、指揮官としての貴方の自業自得だと」

青年は、あくまでも穏やかにそれを口にした。「率直なご意見に感謝するわ。ここに銃があったら、貴方に渡して引き金を引いてもらっているとよろよ」

少佐は酷い顔だった。ラフトに溜まった海水が激しくひっくり返り、まるでドラム式洗濯機の中みたいに容赦無く跳ねるせいで、二人とも頭から

それを被っていた。張は、もともと五分刈りに近いほど髪が短かったが、鍾少佐は、化粧がすっかり落ちて、髪はぼさぼさ。泣いているのか、海水が滴っているのか判別は無理だ。二人とも長いこと海水を浴びているせいで、眼が腫れていた。この時化が収まってくれなければ、いずれ視力も失いそうな気がしてくる。

「そろそろ来ますよ……」

周期的に大波が襲ってくる。一時間前それに襲われた時は、ラフトがひっくり返りそうになった。シーアンカーが引つ張られて、千切れるかと思つた。ぎりぎり持ち堪えてくれたが、いつまでもつかはわからない。確か、プールを使つての洋上脱出訓練で、教官は、ラフトは転覆して天地がひっくり返つても、いずれ元に戻ると教えていたような記憶があるが、今は、それを信じる気にはなれなかった。

たぶん、転覆したら、屋根部分に身体が沈み込み、上から覆い被さってくる重たいフロートに押し潰されることになるだろう。息継ぎも出来ずに、この狭い空間で溺れ死ぬのだ。

鍾少佐は、大波に備えて腰を動かし、座っている位置を少しずらした。張高遠は、波浪の周期の計算式を考えて、次の大波が来る時間を割り出していた。

「生き残ったら、波浪学の研究者になって、漁民のために尽くしますよ。だから、僕を生かしてほしい。それが人類のためになる」

「誰に向かって言っているの？」

「神様。ブッダにジーザスにムハンマドに、ポセイドンに、願いを聞いてくれるなら誰でも良い」

「そこに数学はあるのかしら？ 紐理論は神の領域だと聞いたことがあるけれど」

「今の僕らに必要なのは、体力ですよ。それとも、

僕らが体温を失って意識不明になるまで、あと何時間かかるか計算しますか？」

「結構よ——」

突然、波が静まったかと思つた次の瞬間、まるで背中を押されたかのように、ラフトの端が持ち上がった。そのままひっくり返るかと思つたが、どうにか持ち堪えた。だが、叩きつけられるように、海面に着水した。衝撃で、船底が裂けるのではと思つたほどだった。

「今夜一晩、このラフトが持つたら、製造メーカーに感謝状を贈らなきゃ」

「それは、面白い命題だ。感謝状を贈れなければ、僕らは死ぬってことですよね？」

二人はだが、次の瞬間、顔を見合わせ、さらにラフトの天井を見遣つた。何かのエンジン音が、頭上から覆い被さるかのように襲つてきたのだ。

鍾少佐は、慌てて起き上がると、シエルター部

分のファスナーを少しだけ開いて首を外に出した。見慣れない四発機が、超低空で頭上を通過したのだった。

「救援機よ！」

「ヘリですか？」

「いえ。あれはたぶん飛行艇ね」

少佐は、慌ててライフジャケットを脱いだ。フライトスーツは地味な色だが、ライフジャケットは派手なオレンジ色だ。ここに生存者がいることを教えなきゃならない。

「飛行艇って、無理でしょう？ この時化で着水するなんて」

「いえ。この波は、シー・ステイトで言えば5相当。あの飛行艇なら降りられるわ！」

「冗談は止して下さい。風速だつて時々二〇メートルは行っているって、さっき言つてたじゃないですか？ 僕は飛行機嫌いだけど、陸上の滑走路

でだって風速二〇メートルで離着陸なんて無理でしょう？」

「ぶつぶつ言わないの。さあ博士。貴方の方が小柄だから、私が貴方の身体を支えた方が数学的に合理性があるでしょう？ 飛行服のベルトを握って支えるから、上半身を出して思い切りライフジヤケットを振り回して頂戴！」

「ここで落水したら、もう二度とラフトには上がれませんか？」

「大丈夫。支えてみせるから」

張は、へっぴり腰で舷縁に身を乗り出すと、旋回してくる飛行艇に向かって、弱々しくライフジヤケットを振った。少佐が、全体重を掛けて張博士のベルトを引っ張っていた。

「信じられない！ あの飛行機、空中でほとんど止まっていますよ！ なんてあんなことが出来るんですか？」

「それは、数学の天才の貴方にも説明は難しいわね。簡単に言うと、あの機体は、主翼の上から高揚力装置を使って、気流を下向きに流しているんです。目一杯開いたフラップに向けて。それが、信じられないほど低速でも失速しない性能を生み出す」

「われわれもあんなのを持っているんですか？」

「ええ。我が海軍も飛行艇を持っているわよ。性能は段違いだけど。こと飛行艇に関しては、日本のこれを超える性能のものはロシアもアメリカも持っていないわ」

「でもこの波ですよ？」

「大丈夫。彼らはこの波でも降りられる」

上空をよく見ると、その飛行艇は二機飛んでいた。一機が偵察し、もう一機が降りてくる感じだった。

「自殺行為だ……」

やがて、飛行艇が目の前に着水してくる。派手な水しぶきが上がリ、波間に浮き沈みするラフトからは、一瞬、それが海中に沈んだかのように見えた。

だが、浮かんでいた！——。エンジン付きのゴムボートが降ろされる。潜水服を着た二人の兵士が乗っていた。ほんの一〇〇メートルほどしか離れていなかったが、そのボートが近づくまで、永遠の時間が流れたような気がした。

ラフトに接舷すると、一人が中を覗き込み「二人か！」と指を二本立てた。

「そう二人だけ！ 他にもラフトがある。海上保安庁のラフトに何人か乗っているはず！」

と鍾少佐は英語でまくし立てた。相手は「わかっている！ 確認している」と大きく頷いた。

ゴムボートに乗り移り、飛行艇へと向かう。接近すると、意外に巨大な航空機であることがわか

った。だが側面のハッチは小さい。全員が乗り込むと、両手で耳を塞ぐよう仕草で命じられた。四発エンジンのプロペラが回っているせいで、騒音も飛沫も凄まじかった。

アサルトライフルを持ったクルーがハッチに現れ、彼らが一昼夜乗り込んだラフトへと向けて銃撃を開始した。確実に沈めて、搜索の錯誤を避けるためだった。

横向きのシートに腰を下ろすと、衛生兵と思しき隊員が、まずバイタルを確認した。二人とも、体温が三五度台前半まで低下していた。バスタオルが与えられ、ヒーター付きの温熱毛布にくるまった。

その上からシオルダーハーネスを締めてもらった。

「これ、沖繩とかに向かうんですよね？ 那覇でしたっけ？」と張が尋ねた。

「いいえ。この飛行艇の航続距離を考えると、あと二、三回は着水してクルーを助けるはずよ」

「僕ら、ラフトに留まった方が安全なんじゃ……」

「私はエンジンだから、この機体の性能と、パイロットの腕を信じるわ」

海上自衛隊のUS・2救難飛行艇は、まるでコンクリートの上をバウンドするかのような衝撃を何度も受けながら離水した。最後に離水した瞬間は、ふわっと浮き上がるような感じだった。

無事、空中に上がると、乗組員が、紙カップに入った温かいコーヒーを二人に飲ませてくれた。風が強く、この大型機はガタンガタン！と悲鳴を上げながら飛んでいた。

鍾少佐は、乗組員から会話用のインカムを受け取ると、巡視船に救出された後、何かの、恐らくは魚雷攻撃で、自分たちは宙に投げ出され、しか

し浮き上がってきた巡視船のラフトに、仲間が何人か乗り込んだことを確認していることを教えた。乗組員は、シーアンカーを打った状態のラフトを、他に三隻確認していると教えてくれた。四機の救難飛行艇が出勤し、日中両国政府了解の下に搜索救難活動を展開しているとのことだった。ただ視程が悪く、日中にもかかわらず、見える範囲が狭くて完璧な搜索が出来ているか自信がないとのことだった。

鍾少佐は、やりとりが終わると、機首側をさして「トイレを貸して下さる？」と尋ねた。張は、臉をパチパチさせて、目葉か、真水をとりクエストした。二人の戦いは、ようやく終わろうとしていた。

中国軍による南シナ海東沙島奇襲作戦に端を発した東シナ海の戦いは、九日目を迎えていた。中

国軍は、東沙島の次の戦略目標として、尖閣諸島魚釣島へと強襲上陸し、日本側は、ごく僅かの民間軍事会社の元自衛隊員と、陸自特殊部隊の寡兵でこれを迎え撃った。

台湾軍も加わり、防備に徹していたが、解放軍は、上陸した部隊を援護するために、数度に及ぶミサイル攻撃を仕掛け、海上自衛隊は、イージス護衛艦のミサイル弾庫を空にしてこれを迎撃、飽和攻撃を撃退していた。

日本側は、戦略的忍耐をモットーとし、こちら側から攻勢に出ることはなかった。もとより、そのような戦力も持たない。一方的な防戦だったが、犠牲は、中国軍の方が遥かに大きかった。

日本政府は、尖閣諸島での戦闘状態に関して、国民に対しては一切それを認めず、水面下で中国との和平を探っていた。だが、功を奏さず、アメリカの直接支援も得られない中、尖閣諸島を巡る

情勢は、新たな状況を迎えようとしていた。

第一章 抗体

東京湾は晴れていた。ここでは、東シナ海の戦争とは別の国際的クライシスが進行していた。ウイグル族への弾圧を非難するテロリスト・グループが、上海沖で豪華客船を乗っ取り、船内で中東呼吸器症候群ウイルスをばらまいたのだ。感染者は、船内のみならず、密かにテロリストが上陸した上海を起点に、中国全土にも拡がっていた。

明け方、米海軍のネイビー・シールズが人質解放作戦を執行し、犯人グループは全員射殺され、事件は解決した。だが、船内では今も感染者が増え続けているせいで、客船は、東京湾内をぐるぐると航行していた。接岸はしなかった。接岸する

と、誰かが海に飛び込んで脱出を試みるからだ。

豪華客船「ヘブン・オン・アース」号（一三〇〇〇トン）では、東アジアの諸問題を討議する国際会議が開かれていた。主催は米政府で、日本が金を出した。

日本側は、元海上幕僚長を団長に、自衛隊OBを送り込んだが、元海幕長はMERSで死亡した。中国側も、それなりの数の代表団を送り込んだが、すでに数名の犠牲者が出ていた。

客船には、シージャックされている最中から、防衛医大の医療チームが乗り込んでいたが、治療の成績はあまりよろしくなかった。全て手探りの

状況で治療が続いていた。

客船が解放されたことで、新たな医療スタッフと、エクモの積み込みが為されたが、ウイルスがあまりに危険なため、どんな重症患者でも下船は許可されなかった。

だが、それまで治療に当たっていた防衛医大チームには、船内で休息する余裕も出てきていた。

防衛医大チームではないが、看護師&衛生隊員の資格を持つ第一空挺団・第四〇三本部管理中隊付き小隊長の原田拓海はらだたくみ一尉も、ほんの三時間、仮眠を取ることが出来た。ただし、強風が吹く客船の露天甲板で、防護衣を着たままだった。

ボランティアとして働く、本来はエンタメ部門スタッフのバイオリニスト・是枝飛雄馬これえだひゅうまが起こしに現れた。

「彼女の様子はどう？」

「ええ。めきめきと回復しています。さつきチュ

ーブも外れて、スマホで、母親と娘さんとも会話しました。もう大丈夫でしょう」

「それは良かった。二人の仲が上手くいくことを祈ってますよ」

「音無さんですか。年齢なりの回復度ですが、ドクターの話では、間違い無く抗体カクテル療法の効果が出ているそうです。これが全員に使えるかは、まだまだ症例不足だそうです」

「うちの隊長が聞いたら喜びます」

原田は、日本側代表団が拠点に使っている部屋へと降りた。そこは、代表団長の佐伯元海将さえきが使っていた部屋だった。発症してから亡くなるまで、あつという間だった。

船上で開かれていた太平洋相互協力信賴醸成措置会議P措置会議の事務方を仕切る九条寛くわん外務省・総合外交政策局・安全保障政策課係長と、この船の船医である五藤彬ごとうあきら医師、そして防衛医大から派遣

された永瀬豊二佐。予備自衛官として派遣された三宅隆敏三佐が揃っていた。三宅は五藤の恩師で、二人とも感染症学の専門家。防衛医大出の永瀬は、医者ながらレンジャー・バッジを持つ変わり者だった。

全員がタイベックス・スーツを着ている。マスクも帽子も、手袋まで二重で、さらにゴーグルも装着していた。ここでそれを脱げるのは、強風が吹く露天甲板だけだ。

「これからここで話すことはトップ・シークレットだ。船医の五藤先生は、純然たる民間人だが、感染症学の専門家なので聞いてもらいます。ただし、ここでの話は、他言無用です」

永瀬医師が口を開いた。

「ネイビー・シールズの制圧作戦の後、医療スタッフやボランティア、感染者の血液を降ろしたわけだが、その一次検査の結果が戻ってきた。原田

君、実は君には、MERSの抗体がある。君一人だ」

原田は、目をぱちくりして驚いた反応を示した。「何かの間違いでは？」

「いや、それはない。そもそも、誰だろうが、このウイルスの抗体なんて持っているはずはない。これは、例のウイグル人科学者が改造した変異ウイルスだ。君はその変異ウイルスの抗体を持っていたんだからな」

「僕は感染したんですか？」

「それが問題だ。このウイルスが船内ではまかれたのは、どう見積もっても十日前だろう。上海ではまかれたのは八日前。そして、君を含むわれわれが乗り組んだのは、六日前だ。可能性としては、君は乗船早々に感染し、自覚症状が出ていまウイルスは消え——、つまり抗原反応は出ていない。抗体だけが残ったという可能性もゼロでは

ない……。が、まあほとんどあり得ないだろうな。ただ私は専門家でないので、データを感染症学専門のお二人に見てもらった」

と永瀬は、話を三宅に譲った。COVID・19直後、永瀬が強引に声かけして予備自に登録させた男だった。

「五藤先生とも一致したのだが、君は恐らく、この四ヶ月から半年前に、このMERSウイルスに感染したか、そのワクチンの接種を受けている。もし感染したのであれば、君の周辺で市中感染が発生していたはずだが、そんなニュースはないから、答えは一つだ。君はどこかで、このワクチン接種を受けた。思い当たることはないかね？」

「ああ！——」

と原田は呻いた。

「五ヶ月前、ノースカロライナ州のフォートブラッグ基地で、特殊部隊の戦場医療向けのコンベン

ションがありました。世界中から、アメリカの同盟国の特殊部隊の衛生兵と、その教官が集まって、最新の戦場医療の知識を交換し、医療品メーカーの装備の見本市が開かれて」

「君、あれに行ったのか！」

と永瀬が驚いた。

「あれは、私も出張を申請したんだぞ？　だが、予算が無いと行かせてもらえなかった。軍医殿の私の出張経費が出ずに、なんで衛生兵の君は行けたんだ？　変だろうそれ」

「自分も最初は断られたのですが、自費で休暇を取ってでも行くと申し出たら、部隊長の決裁が下りまして。ただし、飛行機はエコノミー、アメリカの国内移動は格安航空。泊まる場所は、自分で交渉して基地内の兵舎に泊めてもらえということでした」

「エコノミーですか？　うーん、まあそれが妥協点

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。